

本派における佛教保育

佐 藤 順 興

はじめに

現在智山保育連合会に所属している幼稚園、保育園は四十八園になる。幼稚園であれば学校法人や宗教法人、あるいは個人立のもと設立されており、保育園は福祉法人立によつてそれぞれ設立されている。

所属施設は全国約三千ヶ寺の一・六%に過ぎない数であるが、年間一回の教職員研修大会と園長設置者研修会が行われており、教職員の教化や教育を行い佛教保育の研鑽に勤めている。

佛教保育に限らず教育の目標は、教育基本法の前文で「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成」とあり立派な円満な人を作ることであります。佛教保育では宗教という杖をもつて、人格形成を助け、保育そのものであるが、佛教的なやり方が加えられていると内山憲尚先生は言つてゐるし。また、幼稚園を創始した、フレーベルも「教育は人をして善く己を知らしめ、且つ自然と和らぎ、神と一致さす様に彼を導かねばならぬ。委しくいえば、人をして自分と、神と自然とを知らしめ、之によつて純潔、神聖なる生活に達せしめねばならぬ」とい

つていていることから、教育には必ず宗教が不可欠であるということが言える。

しかしながら現在少子高齢化社会にあり施設の存続は決して簡単な事ではなく、多少の地域差はあるもののいずれの施設も仏教保育の特色を生かして日々乳幼児やその保護者と関わり仏教保育教育方針の基礎とし教化推進に努めている。

まずははじめに幼稚園と保育園の概要についてふれ、各施設で仏教保育がいかに教育の基礎として取組まれているか検証する。

幼稚園とは

幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とし、（学校教育法第七十七条）その実現するために、次の各号に掲げる目標の達成に努めなければならない。

- 一、健康、安全で幸福な生活のために必要な日常の習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。
- 二、園内において、集団生活を経験させ、喜んでこれに参加する態度と協同、自主及び自律の精神の芽生えを養うこと。

三、身辺の社会生活及び事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養うこと。

四、言語の使い方を正しく導き、童話、絵本等に対する興味を養うこと。

五、音楽、遊戯、絵画その他の方法により、創意的表現に対する興味を養うこと。（学校教育法第七十八条）

*平成二十年四月より改正される

とあり、三歳から就学前の幼児を保育教育する施設である。

保育所とは

日日保護者の委託を受けて、保育に欠けるその乳児又は幼児を保育することを目的とする施設であり、特に必要があるときは、日日保護者の委託を受けて、保育に欠けるその他の児童を保育することができる。（児童福祉法第三十九条）とあり〇才から就学前の幼児を保育している。

幼児期の教育

〇歳から就学前の子ども達にとつて一番必要なことは、日々生活の中で育まれる基本的生活習慣の獲得であり、月齢や年齢に応じた保育や教育を施すことが大切である。

幼稚園では幼稚園教育要領で定められているように、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とし、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するよう努めるものとする。

一、幼児は安定した情緒の下で自己を十分に發揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されること。

二、幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようすること。

三、幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどつて成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題

に即した指導を行うようすること。

その際、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。

(幼稚園教育要領総則から抜粋)

さらに教育目標を、健康（健全な心身の基礎を培う）人間関係（道徳性の芽生えを培う）環境（豊かな心情や思考力の芽生えを培う）言葉（話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養う）表現（豊かな感性を育て、創造性を豊かにする）の五つの領域に分けて生きる力の基礎を身に着けられるよう取り組んでいる。

各施設の佛教保育

それでは実際にどの様な活動が実践されているか智山保育連合会加盟園にお答えいただいたアンケートを基に紹介する。

*佛教行事

- ・お釈迦様の誕生と成道と涅槃の行事である三佛忌に参加する。
- 降誕会では、お釈迦様がお生まれになられたルンビニーの花園の様子を花見堂に現しその中の誕生仏に甘茶をかけてお祝いしている。園児が折り紙や花紙で花御堂を作ったり、地域住民が参加できるように稚児行列を出したりして広くお釈迦様について感心を持つてもらうよう配慮している。

成道会では、本堂でご本尊様に献灯献花献香を行い、法楽の後お釈迦様の伝記物語のスライドや紙芝居を見る。また、お釈迦様が山林から出てニレン禪河で乳粥をいただいた故事に倣い、牛乳をいただいたりする。

涅槃会では、住職（園長）さんのお話を聞いたり、お釈迦様の涅槃図を見たり、日ごろの心のあり方やいのちについて保育中に話をしたりして少しでも印象深いものとなるよう配慮している。涅槃団子を頂く。

- ・青葉祭りに参加する

幼児に念誦を持たせ本堂に連れて行き、住職（園長）さんの法話を聞いたり、献灯や献花、献香、又お大師様の歌や散華の舞を奉納、スライドや紙芝居見て宗祖弘法大師について知る。

- ・七月又は八月のお盆の時にみたまつりに参加する

幼児を本堂に連れて行き、住職（園長）さんの法話を聞いたり、献灯献花献香献歌をしたり、スライドや紙芝居を見て宗祖弘法大師について知る。また、盆踊りを行い地域ならではの風習や習慣について知る。

- ・施餓鬼会、春秋彼岸会、七五三会、元旦護摩、節分会、大般若会に参加する。

*保育活動

- ・朝礼で御本尊様に合掌手を合わせること。その後、お誓い・お祈り・園歌「おはようお大師様」を歌う。
- ・仏教説話の絵本や紙芝居の読み聞かせを行っている。
- ・年長のお泊り保育の二日目の朝に、園児一人一人が足を組み、半眼で座禅を行う。
- ・毎月本堂又は集会場に集まり本尊礼拝を行う。その際園児は数珠を持ち参加する。
- ・保育中や集会の時に、行事にまつわる話を園長や住職がして、幼児なりの仏教、行事への理解を深める。

- ・行事の数日前には幼児の理解しやすいように、パネルシアター、紙芝居等を用いて仏教行事の話をす。
- ・毎朝の活動で、先生の指導によりお誓い「①みほとけ様は知っています。みんな正しくいたしましょう。②みほとけ様は見ていています。みんな仲良くないたしましょう。③みほとけ様に見守られて見んな良い子になります。」朝の歌、ののさまの歌を斎唱し朝のひと時心静かに黙想をする。
- ・昼食では当番の数名が前に立って、合掌していただきますをする。
- ・お泊り会では、年長児が幼稚園と本堂境内で一泊する。朝の勤行では焼香をして法話を聞く。
- ・「ののさま」「じっとおめめを」の歌を唄う。
- ・年長児の当番が仏さまにお花とお水を上げる。
- ・毎月の目標とねらい（仏教用語）に基づく話を聞く。
- ・生活の教えや季節の仏教行事に関する紙芝居を見る。
- ・勤労感謝の日に、お寺のお坊さんにインタビューをする。
- ・年長児は三仏忌（降誕会・成道会・涅槃会）の製作を必ず行う。
- ・園庭にあるお地蔵様に帰りに手を合わせ「お地蔵様今日一日ありがとうございました。明日も元気にしてください」と毎日お参りする。
- ・毎月の幼児の誕生会は、稚児大師像の安置されている遊戯室でおこなう。
- ・年長児を対象に園長（住職）が書道の指導を行う。約十五分のお習字中は私語は許さず、整然と厳肅なに行われます。短い時間ですが姿勢を正し緊張感の中で心静に活動する。

筆者の園では、子ども達が毎朝登園する際に、お寺の山門に安置されている筋骨隆隆のぎよろりとした仁王様が安置されている山門を通つて境内に入る。境内には桜や松、もみじや菩提樹、ドンクリの木や椿など四季折々の樹木が植えられ子ども達だけでなく保護者や檀信徒の目を楽しませている。園の門扉には合掌童子が安置され元気良く登園する子ども達を和やかなまなざしで迎えている。園長先生や担任の先生と元気良く挨拶をして保育室に入るのだが、このとき一人一人を視診し子どもの心身の様子を確認する。保育室に入ると、おたより帳に日付シールを貼り衣服の着脱をして園庭に飛び出していき思い思に活動する。クラス全員登園すると朝の活動が始まる。季節の歌を唄い、手遊びを楽しみ、のの様に挨拶の歌をクラス全員で唄い、今日も一日元気で楽しく過ごせるよう合掌をして静かに目をつぶり気持ちを落ち着かせお祈りをする。この活動の積み重ねが宗教情操教育の礎となる。その他、月に一度の礼拝や三仏忌などの仏教行事を通して、のの様の存在や目に見えないものへの恐怖の念を育む。

しかし、幼児教育の重要なことは、遊びを通して安定した情緒の下で自己を十分に發揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであり、幼児の主体的な活動を促し幼児期にふさわしい生活が展開されるようとすることが重要である。園生活においての日々先生とのかかわりやご本尊さまや本堂や境内等の物的環境、勿論、園長先生としての僧侶によつて育まれる心の発達が佛教保育そのものになると考えられる。

*宗派教育・宗教知識教育

- ・毎月一度のお経稽古で「御法号」と「般若心経」と「光明真言」を子ども達と唱える。
- ・佛教保育時間を設けて、お寺から授けられた子ども用の数珠を手に持ち、職員は輪袈裟と数珠を持つてお経を

唱えたりお参りしたりしている。

- ・般若心経や勤行式をはなまつりと成道会でおこなう。
- ・年長児を対象に阿字觀（体験として年一回程）
- ・毎月本堂において正座をして静かに目を閉じて心を落ち着かせる活動をする。
- ・三仏忌の法要に全園児で参加する。

- ・毎週水曜日「み仏さま」と言う名のもとに全園児で独自の活動を行う。
- ・全園児がお盆の時に、創立者の墓参りをして花と線香を供える。

* 仏教保育目標

四月：合掌聞法（入園進級を喜び、園生活に親しもう。）

入園や進級して間もない子ども達は、園生活に慣れるのに一生懸命です。初めての環境、人間関係、生活習慣に戸惑いながらも、担任の保育者によつて導かれていきます。家庭と園との足並みがぴたりとあつた時の姿は両手を合わせる合唱に象徴される。先ずは心を落ち着かせて自ら静かにお話が聴ける心の姿勢（聞法）を育てる。

五月：持戒和合（決まりを守って、集団生活を楽しもう。）

人が成長していくと言うことは、自分のことだけでなく段々他の人のことも分かるようになるということです。クラスの様子も分かつてきて、遊びを通して友達とかかわり、お互いの気持ちを知つたり、時にはぶつかり合い、時には助け合つたり（持戒）しながら園生活を楽しみます（和合）。

六月：生命尊重（生き物を大切にしよう。）

気候も暖かくなり、幼稚園の園庭には様々な動植物が伸び伸びと躍動します。その動植物との触れ合いの中で、生命を感じ、生かされている事を知ります。また、使い慣れた遊具や道具を大切に扱う事を知ることもこの時期に大切なことです。総ての生きとし生けるものや、物に感謝し大切にします。

七月：布施奉仕（だれにでも親切にしよう。）

三歳から五歳までの幼児期における話し合いこそ人間の心の栄養となります。一学期が終わろうとしているこの時期に豊かな話し合いすることで自己中心的な考えを脱し、他人の存在を知り、友達と触れ合い親しくなることで、相手を思いやる気持ち（布施）や優しい気持ち（奉仕）ちが育まれます。友達を大事にしようと言う素直なやさしい心の育みを大切にする。

八月：自利利他（できることは進んでしよう。）

自利とは自分の為、利他とは他の人の為ということです。幼稚園は夏休みに入り、家庭での生活が中心となります。四月からの通園で身につけた様々な事を、家庭で実践するよい時期です。自分でできることは自分で行い、達成感や満足感をお父さんやお母さんと共に分かち合いより深いものにします。

九月：報恩感謝（社会や自然の恵みに感謝しよう。）

二学期がいよいよ始まります。夏休みの間に一回り大きくなつた心と体は、決して一人だけの力ではありません。色々な人に支えられていることに感謝し、実りの秋です。自然や社会の恵みに感謝する気持ちを育てます。

十月：同事協力（お互いに助け合おう。）

園行事では運動会を控えているこの時期に、一人一人力をあわせて目標に向かつて取組むと、自分ひとりでは

できなかつたことも出来るようになる事を知ります。また、自分ひとりだつたら勝手に出来たことも、皆でやる時には相手の意見も聞かなければなりません。互いがその立場や努力を認め、協力しあう気持ちを育てます。

十一月：精進努力（最後までやり遂げよう。）

少しづつ冬に向かい、戸外の空気も寒くなります。保育室内に閉じこもりがちになる事もあるでしょう。体を動かして寒さを吹き飛ばす位強い気持ちを育て、成道会生活発表会に向けての活動も始まります。目標に向かって最後までやり遂げる気持ちを育てます。

十二月：忍辱持久（教えを知り、みんなで務め励もう。）

十二月八日はお釈迦様が悟りを開いた日です。菩提樹の木の下で長い瞑想の末に悟りを開きブッタとなつた日にちなみ、お遊戯会や発表会開かれることもあるでしょう。日々の積み重ねた成果をいよいよ発表し成し遂げた時の喜びを味わう。

一月：和顔愛語（寒さに負けず、仲良く遊ぼう。）

三学期の始まりでもありますし、一年の始まりの月でもあります。一年の計は元旦にありといいます。優しい顔でやさしい言葉を掛けられれば誰でも気持ちが和らぎます。親しみをもつて人の話を聞いたり話したり、自分の思いを自分の言葉で表現できるようになります。

二月：禪定静寂（よく考え、落ち着いた暮らしをしよう。）

六波羅蜜のひとつ禪定。心がひとつに定まりぶれないことです。この時期は作品展が行われることもあるでしょう。子ども達ひとりひとりが、落ち着いて様々なテーマを考え活動に取組みます。静かな時間が子ども達の想像力を育みます。

三月：智慧希望（希望を持ち楽しく暮らそう。）

智慧とは知識とは異なります。物事をするにあたり、誤らず正しく判断し正しい選択ができる事を言います。智慧を磨き希望を持つてより良い社会を築き、総ての人々が幸せに暮らせるように教え示します。智慧の目を持つて見るときにはじめて希望を持つて取組むことができるのです。

以上のように毎月の仏教保育徳目を（社）日本仏教保育協会が発表している。必ず採用しているとは限らないが、年齢に即した保育カリキュラムを決めている。

*仏教施設の活動意義

- ・「生命尊重」をどのようにして、心の中に根づかせるか。また、感謝する心や思いやりの心を育てることで、いじめたりいじめられたりしない子どもが育つようにという思いやねらいを持っている。
- ・「ありがとうございます、ごめんなさいを素直にいえる子ども」を保育信条とし感謝の心反省の心が乳幼児期にしつかり育つよう保育している。
- ・難しい事を理解してもらうのではなく、幼児なりの理解で良いから、仏教に興味、関心を持つてゐるようになつて欲しい。仏教を通して、特に大乗仏教なので、自分ひとりではなく、周りの多くの人とともに仲良くなれるよう、やさしさや人を思いやるところを育てる。
- ・感謝することや、相手を思いやる心、命の大切さ等を育てる。心を落ち着かせる。
- ・仏教の教え、釈尊が説かれ導いたみほとけの教えを押して「生命（いのち）を尊重し、正しさを見て絶えず進む」を指針とし、みほとけの子である幼児を保育し、心身ともに健康で、相手の心を思いやるやさしい豊かな

心で、こどもをはぐくんで欲しいと願つております。今日、毎日のように起きている殺人で尊い命が失われております。又児童虐待や小学生・中学生等のいじめなどで、自己中などといふ、自己中心の世相の中で共に生きて生かされている事を知らせて行きたい。仏教の第一義は不殺生戒であり、無益な殺生を戒めています。生命の大切さを児童の心の畑の中に種を撒くことは大事なことです。そして、自分の生命を大切にする事と同じに、他の人の生命や総ての生物の生命を大事にすることをしつかりと教えていくことによりその種がいつか花開く時があると思います。悉有佛性を信じて、大人になつても生命を大事にすることをしつかり教え示す。

- ・自己主張ができる、仲良く遊べることを育む。
- ・素直に「ありがとう」「ごめんなさい」と言える子ども達を育てます。お釈迦さまのお話を自分が尊いのではなく他の児童も自分で同じ様に尊く、限りあるいのちであるとおしえていて。
- ・日々の保育の中に合掌、礼拝することを自然に生活に採り入れて仏教儀礼が身につくよう配慮している。
- ・元気、仲の良い、健やかな子を育てる事が目標であり、礼儀をわきまえ、思いやりのある子を育てる。
- ・仏教用語に基づくねらいを毎月学ぶ事により、思いやりや感謝助け合いの精神を育てる。
- ・人間形成の大事な時期に「仏様の教え」に触れる事で、今後人生において良い影響をもたらされるよう配慮している。
- ・自利利他：自分とそして相手を大切に思いやれる気持ちを育てる。
- ・仏様やご先祖様、そして生きとし生けるものへの感謝の気持ちを育てる。
- ・自分ひとりで生きているのではない、私たちは皆から生かされているという謙虚な気持ちを育てる。

- ・偉大な自然などに対する祈りの気持ち、敬意の念を育てる。
- ・良いことを行い自分から心を綺麗にするよう保育する。

・子どもとの信頼関係をしっかりと築き、古くから当たり前のように受け継がれてきた心を伝承する。
・信頼できる保育士、仲良しのお友達、好きなことへと没頭できる時間と空間により、「自分は大切にされているな」「人生つて楽しいのだな」という自己肯定の気持ちを育み、また、それを世界全体を肯定的に捉える気持ちへと繋げる。

・仏様だ、保育だと肩肘を張らずに、子どもたち一人ひとりの気持ちをしっかりと受け止め、心を通じ合わせること。真心を込めて保護してあげること。子どもたちの無我夢中の時間を保証してあげること。心の土壌作りのお手伝いをする。

・様々な生き物との触れ合いを通して、命の偉しさや素晴らしさ、逆にもろさや無常といった感覚。自然と仲良しになることの楽しさを通して、生命の大切さを育む。

佛教保育の成果

- ・「手を合わせる」ことでお大師様に見守られて、生かされていることに感謝し人に思いやりの心を持つ事を子どもたちの心に芽生えている。
- ・保育園のみならず家庭においても食事の前後の合掌をして「いただきます、ごちそうさま」することで、仏壇の前の合掌、正座などが身に付き自然とできるようになってきているとお家の方や地域の方から喜ばれている。またニワトリやうさぎ、金魚などの生き物を飼育したり、野菜の栽培をしながら命の大切さ尊さを理解

する力が育っている。

- ・仏教行事に参加することで、ののさまの生涯に興味、関心を持つようになった。
- ・正座と違う足の組み方を覚え姿勢をまつすぐにしようとする気持ちが芽生えた。
- ・普段とは異なる環境（神聖、莊嚴）の中で行うことにより、「ここでは、真剣に行事に参加する」という意識が強くなっていると思う。又数珠を持つことにより、参加する意識が強くなっていると思う。
- ・仏様・お大師さまの話を聞き、幼児なりに理解し、やさしさや、人を思いやる心が育っていると思う。
- ・朝の挨拶は一日の無事を祈る意味で手を合わせて挨拶をする。また、食事を取る前にも感謝する意味で手を合わせてから「いただきます」を言います。子ども達は自然に手を合わせるようになる。
- ・手を合わせる習慣が身に付く。
- ・ある保護者が、身内の者が亡くなった時に、子どもが般若心経を唱えてくれたので感激したとの報告があった。
- ・二十年前に般若心経を礼拝の時に共に唱えた。（現在はやめている）
- ・共に仏壇をお参りしてくれるので嬉しいとの報告があった。
- ・園児たちは常に「ののさま」を身近に感じ「いのちの大切さ」を年齢なりに理解している。
- ・週に一度心を静かにさせる時間を持つことにより落ち着きが養われる。
- ・思いやり感謝の精神が生まれる。
- ・境内（お寺・仏教）を身近に感じることができた。
- ・毎朝、心を落ち着かせる時間を持つことにより、活動がスムーズに始まる。
- ・保護者、園児に向けて仏教保育園としての思いを伝える。

・生活力、ひいては情緒の安定、自立、自律に向けての姿勢が見えてくる。

・一人一人（職員も含めて）の思いを大切にするコミュニケーションが確立する。

まとめ

智山保育連合会加盟園のアンケートによる、各施設の活動内容を書き出してみたが各施設とも積極的に仏教行事を取り入れていた。また、真言宗智山派の教理に特化した内容だけではなく、「ののさま」と言うお釈迦様を寄り簡単に身近に感じられるような工夫もされている。

礼拝・三仏忌・お彼岸・お盆法要・七五三・節分などの季節の行事を通じて、献灯献花や数珠を使った礼拝、ご住職の法話や、教材を使った保育。活動を通した情緒の安足を図り。般若心経の読教、座禅に精神統一。など様々な活動を通じて宗教情操教育が行われてきた。やはり、生命尊重、生かされている事を知る為に総ての活動が行われていることが各施設の共通の思いである。

社会全体が未来に対する危機感を持つてゐる今こそ学校教育法に宗教情操教育明文を望むが、歴史的背景を検証をする必要がある。

現在社会一般に子どもの教育改革が重要視されると共に、子どもを取り巻く社会環境の変化はめまぐるしい。道徳心がなくなつたからとか、家庭教育力が無くなつたからとか、地域力がなくなつたとか、様々な問題点が指摘されている。

仏教という生き方を通して幼児達に目に見える事だけが総てではないのだ、自分ひとりで生きているのではないのだ、生かされている事を喜び、子ども達は「生きている」と実感しはつらつとした躍動と人とも自然とも積

極的に関わろうとする力を育み、それらを大事に尊重することが大切である。

間違つてはならないことは、宗派を問わず私立の幼稚園や保育所において宗教教育をすることは自由であるが、保育の本質を離れて乳幼児の成長発達段階を無視した事や本質を離れた宗教教育がなされたならば、子どものためにならないと理解しなければならない。また、世の中の価値観の多様化により、「しつけ」と「道徳」と「宗教」についての解釈が曖昧で、それらを明確にすることで人間教育とは何かという本質が見えてくると思われる。宗教情操教育を体系化するには、宗派の教理や仏教についての研鑽と幼児期に必要な教育の更なる研鑽が必要と考える。引き続き宗教情操、仏教保育、幼児教育の現状と課題を考察し調査する。